

音楽部会 研究の構想（案）

平成30年度～

I 研究主題

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

II 主題設定の趣旨

音楽部会においてはこれまで、①〔共通事項〕を支えとした指導計画の作成、②〔共通事項〕を支えとした学習指導の工夫、③学習評価の工夫の三つの視点を中心に研究してきた。その結果、ねらいに即した指導計画及び学習指導が工夫され、ホワイトボードやICTを活用したり、学習形態（ペア・グループ学習等）を工夫したりした授業づくりを推進してきた。〔共通事項〕を支えとすることは音楽科教育の根幹であり、今後も引き続き研究を深める必要がある。

さて、学習指導要領の音楽科の目標では、音楽科で育成を目指す資質・能力を「生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力」と規定された。また、「音楽的な見方・考え方」とは、「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、伝統や文化などに関連付けること」としている。これは、音楽科の特質に応じて物事を捉える視点や考え方であり、生徒にとって音楽を学ぶ意義の中核をなすものであるとともに、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を進めるに当たり、特に「深い学び」を実現する鍵となるものである。

その上で、音楽科が育成すべき資質・能力については、(1) 曲想と音楽の構造や背景などとの関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。（生きて働く「知識及び技能」の習得）(2) 音楽表現を創意工夫することや音楽のよさや美しさを味わって聴くことができる。（未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成）(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養）の三つの柱に再整理された。

平成30年度からは、学習指導要領の目標の趣旨と上記の三つの柱に基づき、主題解明に向けて研究を進めてきたが、令和2年度は、新型コロナウイルスの感染が拡大する中、十分な研究活動ができたとはいえない。また、育成すべき資質・能力の内、音楽科における「知識」については、実践を通じた研究を深めていく必要があり、これまでの「研究の構想」を1年間継続することとした。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するため、これまでの研究成果や課題を整理し、生徒の実態を踏まえながら、継続的な研究を通して研究主題を解明する。

2 研究内容

(1) 指導計画作成の工夫

- ・資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る指導計画の作成
- ・題材など内容や時間のまとまりを考慮した指導計画の作成
- ・〔共通事項〕の適切な位置付けと、〔共通事項〕を要とした各領域や分野の関連

(2) 学習指導の工夫

- ・「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実
- ・音楽科の特質に応じた言語活動の充実
- ・協働的な音楽活動の充実と学習形態の工夫
- ・音や音楽と生活や社会との関わりを実感できる指導の工夫
- ・ICTを効果的に活用した指導の工夫

(3) 指導に生かす評価と学習状況を記録に残す場面・方法の工夫

- ・指導に生かす評価の充実
- ・育成を目指す資質・能力を明確にした評価の工夫
- ・ICTを活用した生徒の学習記録の累積
- ・自己評価や相互評価等、生徒が学びを実感できるような評価の工夫
- ・個に応じた指導の充実を図ることのできる評価のPDCAサイクルの構築

音楽部会 令和3年度研究計画（案）

I 研究主題

幅広い音楽活動を通して、「音楽的な見方・考え方」を働かせ、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。

—育成を目指す資質・能力を明確にした指導計画と指導に生かす評価—

II 主題について

昨年度は、題材ごとに教師が育成したい資質・能力を明確にし、それを身に付けさせるための教材選択や指導を展開する研究を進めてきた。授業において、既習事項を生かした発問や興味・関心を高める教材提示、板書の工夫等、「音楽的な見方・考え方」を引き出す一連の学習過程の工夫が見られた。また、協働的な学習の場面の設定や学習形態、音楽科の特質に応じた言語活動の位置付け等についても研究が進められてきた。しかし、育成を目指す三つの資質・能力について、どの場面でのどのような方法で定着を図るのかを念頭におきながら評価し、それを次の指導にどのように生かすかという点においては、さらなる充実が求められる。評価の場面と方法については、3年間の「内容のまとめり」を見通した上で、題材ごとの全体計画や年間計画に位置付けることが大切である。

これらを踏まえ、今年度は研究の副題を「育成を目指す資質・能力を明確にした指導計画と指導に生かす評価」とした。研究を進めるに当たっては、教師が育成したい資質・能力に適した教材を選び、生徒の思考・判断のよりどころとなるものとして、主な「音楽を形づくっている要素」を教材から読み取りながら活動内容を構成していく。そして、どのような力が身に付いたかを評価し、指導の改善を図るとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにすることが大切である。その際、総括的評価だけでなく、授業の各場面において生徒の様子を観察し、評価したことを指導に生かす形成的評価にも焦点を当てることで、指導と評価の一体化を実現させるよう研究を進めていきたい。

III 研究内容とその視点

1 指導計画作成の工夫

- (1) 育成を目指す資質・能力を明確にした、指導計画・指導案を作成する。
 - ・学習の見通しや振り返りを通して、自身の学びの変容を自覚できる場を設定する。
 - ・対話によって自分のイメージを広げたり、思いや意図を深めたりする場を設定する。
 - ・学びを深めるために、生徒が考える場面と教師が教える場をバランスよく設定する。
- (2) 題材など内容や時間のまとめりを考慮した指導計画を作成する。
 - ・小学校や前学年までの学習を踏まえ、3学年間を見通した指導計画を作成する。
- (3) 〔共通事項〕は、「A表現」及び「B鑑賞」の指導と併せて、十分な指導が行われるよう適切に位置付ける。
 - ・必要に応じて、〔共通事項〕を要として各領域や分野の関連を図る。
 - ・生徒の思考・判断のよりどころとなるものとして、主な「音楽を形づくっている要素」を適切に選択する。

〔共通事項〕

- ア 音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えること。
- イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる用語や記号などについて、音楽における働きと関わらせて理解すること。

2 学習指導の工夫

- (1) 「音楽的な見方・考え方」を働かせ、思考、判断し、表現する一連の学習過程の充実を図る。
 - ・ねらいを明確にし、学習課題を明示するとともに、終末ではその時間の学習課題の達成が実感できるようなまとめの活動を行う。
 - ・思考、判断し、表現する一連の過程を大切に板書や発問、ワークシート等を工夫する。

- (2) 音楽科の特質に応じた言語活動を位置付け、音や音楽によるコミュニケーションの充実を図る。
 - ・音や音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図等を相互に伝え合う活動と音や音楽で伝え合う活動をバランスよく融合させる。
 - ・実際に音や音楽で表現したり、聴いて確かめたりするなどして、言葉で表したことと音や音楽との関わりを捉えられるよう指導を工夫する。
- (3) 知覚・感受したことを、他者と共有したり共感したりする協働的な学習の場面を設定するなど、主体的・対話的で深い学びにつながるよう学習形態を工夫する。
 - ・ねらいに即したペア・グループ学習を効果的に取り入れる。
 - ・体を動かす活動を行う際は、音や音楽、言葉などで表すことと組み合わせながら、目的に応じて効果的に取り入れるよう工夫する。
- (4) 音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導を工夫する。
 - ・自然音や環境音等について取り扱い、音環境への関心を高める。
 - ・取り扱う教材と学習内容とを適切に関連付ける。
 - ・音楽が果たす役割を感じ取ることでできる教材を適切に選び、それを考えさせる授業を行う。
 - ・学びを学校内外の音楽活動に生かす場面を想起したり、振り返ったりする活動を取り入れる。
- (5) 指導のねらいを明確にして、ICTを効果的に活用できるよう指導を工夫する。
 - ・様々な感覚を関連付けて音楽への理解を深めることができるよう指導を工夫する。
 - ・主体的に学習に取り組むことができるよう、ICTを音楽活動や学習を補助する役割をもつものとして有効に活用する。

3 指導に生かす評価と学習状況を記録に残す場面・方法の工夫

- (1) 生徒の学習状況を常に把握し、それを基に学習を充実させていくといった指導に生かす評価を行う。
- (2) 育成を目指す資質・能力を明確にし、各題材や各時間に位置付け、適切な場面、方法で評価を行う。
 - ・「知識」については、実際に音楽を聴いたり演奏したりすることで気付き、理解が深まることに留意し、曲想と音楽の構造等との関わりについての理解の状況を評価する。
 - ・「技能」については、その技能を活用して豊かな音楽表現ができるようになることに主眼を置き、創意工夫を生かした表現をするために必要な技能の習得の状況を評価する。
 - ・「思考・判断・表現」については、「音楽を形づくっている要素」の知覚・感受、また、知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている状況や、思いや意図をもつ過程や結果の状況を評価する。その際に知識や技能を活用しているか、新たな知識や技能を習得しているかということ意識する。
 - ・「主体的に学習に取り組む態度」については、題材の学習内容等に関心をもつことができるようにしながら、生徒が目標に向かって粘り強く取り組み、自らの目標の実現に向かうよう、自己調整をしようとしている姿を継続的、かつ、適切な場面で総括的に評価する。
- (3) ICT等の活用やワークシートの工夫を図り、授業の中で計画的・継続的に評価を行い、生徒の思考が深まっていく過程を記録できるようにする。
- (4) 生徒による自己評価、相互評価を行うなど、生徒が学びを実感できるよう評価の方法を工夫する。
- (5) 学習指導の在り方を見直すことや、個に応じた指導の充実を図ることのできる評価のPDCAサイクルを構築する。

IV 研究方法

- 1 学習指導要領の趣旨等の理解を深め、研究の継続と累積に努める。
- 2 各郡市内や郡市間での研究体制を整え、日々の授業実践を基に、協同研究を推進する。
- 3 教師自身の感性を磨き、指導力及び授業の分析・考察する力の向上を目指して積極的に研修を行う。
 - (1) 様々な研修会等に積極的に参加し、目指す資質・能力を育成する方法や技能をより一層磨き、教師力を高める。
 - (2) 授業や評価に関する技能向上のため、充実した学習会や協議会を企画・運営する。
 - (3) 授業に関する資料を持ち寄ったり、新しい教材の紹介や地域の人材に関する情報交換を行ったりするなど、教師間の連携を密にする。

